

第33回 ICA円卓会議報告

国際交流委員会 小川千代子

第33回ICA円卓会議は、去る1998年9月8日（火）から12日（土）までの5日間、スウェーデンのストックホルムで開催された。会議は、8日（火）夕刻、ストックホルム市庁舎の、ノーベル賞受賞式が行われる大広間を会場に市長主催のレセプションが行われたのを皮切りに、翌日からはスカンディッククラウンホテルの会議場で、「情報へのアクセス」をテーマに5つのセッションが設けられ、3日間で合計20人余りの報告やパネルを聞くという構成であった（表1 研究報告一覧）。報告は各国の政府情報システムと文書館＝ナショナルアーカイブズの関係の説明するものが中心で、世界の趨勢はアーカイブズが政府の情報政策に深く関与するように

なっていることが浮き彫りにされた。今日のアーキビストは今や歴史資料を選ぶこと以上に、情報化時代のなかで、情報化技術に乗せられている歴史資料を残す方法論を検討することを社会から期待されている、あるいは自らその責任を引き受けようとしているように思われた。ひるがえって現在の日本では、そうした部分をだれが考えているのだろうか。次々と展開される研究報告や、活発なパネルディスカッションを聞きつつ、日本の現状や、アーキビスト団体としての全史料協の共通関心が、このような世界の趨勢に比べると、大きくかけ離れているのではないか、というのが正直な感想であった。

また、今回はICA創立50周年記念会議でもあ

った。円卓会議3日目の夕刻、スウェーデン国立文書館大閲覧室を会場に創立50周年記念式典が行われたこともあり、第1回ICA大会に出席していたというデンマークのアーキビスト、ハラルド・ヨルゲンセン氏(91歳)をはじめ、エックハルト・フランツ博士(独)、ハンス・ボーム博士(独)、マイケル・ローパー氏(英)、ジャン・ファビエ氏(仏)、ジャン＝ピエール・ワロー博士(加)等々、1980年代から1990年代前半に活躍した大御所ともいふべき、欧米の著名なアーキビストが多く参加していた。このことは、今回の円卓会議の特徴であろう。

見方を変えれば、1990年代後半になって、欧米の主導的アーキビストの顔ぶれが大きく入れ替わったということでもある。かねてから引退の話が出ていたミスターICAとも呼ばれた事務総長、シャルル・ケスケメティ博士は、36年間に及ぶ勤務を終え1998年9月末日付けで引退し、替わって10月からはオランダ・ドルトレクト市文書館長のジョアン・バン・アルバダ氏が新事

務総長に就任することも正式に明らかにされ、ICAはいよいよ新たな半世紀に足を踏み込んだのである。

最近、円卓会議の参加人数は増加の一途である。1997年に150人を越えたと主催者が驚いていたが、今回は随員や主催者側も含めると、参加国数64カ国、約250人の大規模な国際会議に成長した。1989年にスペイン・マドリッドで開催された第26回円卓会議は参加者70名ほど、会期中にはほぼ全員が言葉を交わし合い、知り合える「仲間内」の会議と言う印象を持ったものである。だが、今日ではそのような交流はいささか困難となった感がある。また、各国とも参加メンバーの入れ替わりが目立つようになってきた。

このような規模の会議になると、「国際交流」のためには、専門知識はもとより、その他に相当の外交手腕や人脈構築能力が求められる。全史料協の国際交流も、世代交代を視野におさめ、参加人数を増やすなど層を厚くすることを真剣に考えるべきではないだろうか。

決議・勧告

第33回国際文書館評議会円卓会議 /1998.9.9-12 スtockホルム/決議(案)

- ◆ 技術発展は今日の驚異の情報世代を導きだし、またデータ通信が世界に網を巡らす時代を導き出したこと；
- ◆ 新たな情報通信技術は我々の専門とするアーカイブズへのアクセスという中核機能の拡がりを決定するのに欠かせない影響力を保持していること；
- ◆ 文書館とアーキビストの国際コミュニティは、IFLA、ARMA、IRMT、FIDなど関連専門分野の国際組織と積極的に協力し、または接触の調整を行うべきであること。こうした動きは、情報アクセスに関する文書保存活動への情報通信技術統合に向けた方向性を探るために行う；
- ◆ 協力活動はICAメンバー国の文化、組織、

経済、社会が相違するという認識を前提として行わなければならないこと；

以上4点を考慮しつつ、第33回国際文書館評議会円卓会議は次の8項目を勧告する：

1. ICAはその諸パートナー、特にIFLA、ARMA、IRMT、FIDなどと緊密な協力をを行い、北京アジェンダ、および現代記録管理協定、ならびに地球規模情報同盟に向けて、積極的活動を継続すること；
2. 各国の文書館機関は外部専門家団体メンバーとともに、ISOおよび各国標準化担当機関の業務のうちアーカイブズ実務の標準化分野では積極的に参加し、情報通信技術および情報管理標準の開発に貢献して、リーダーシップを発揮すること；
3. ICAはメンバーに対し次を提供する：
 - －電子情報管理及び文書記録の電子的管理に関する現状の概説資料；
 - －この分野で用いる通常の技術用語の定義を

研究報告一覧

表 I

各セッションの テーマ	個 別 報 告
1 問題点の確認	<p>司会 エリック・ノルベリ (スウェーデン)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆フィリップ・ケオ (ユネスコ) 共通するものはなにか：情報化社会とアーカイブズ ◆ピーター・セイベル (ストックホルム大学法学部教授) ボーダーライン上の技術：スウェーデンの抱える諸問題 ◆トラ・ビクソン (RAND社、米) デジタル資料の管理：技術面からの挑戦と機関の対応 ◆ハビバ・ゾン・ヤハヤ (マレーシア) 公私文書館所蔵情報へのアクセス提供についての技術面の考察
2 これまでの実務 をふりかえる	<p>司会 クリスティーン・アーデン (ARMA International 会長)</p> <p>基調報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ジャン＝ピエール・ワロー (オタワ大学教授、カナダ) アーカイブズ実務の点検 <p>パネル報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆イバル・フォネス (ノルウェー) アーカイブズ実務の点検 ◆イシュベル・パーンズ (英) アーカイブズ実務の点検 ◆リーン・チャールズ (ベルギー) 「Dulle Grief」：コンピュータによるアーカイブズ管理システム ◆バージニア・チャコン・アリアス/ジェイム・アントン・ド・シルバ (ブラジル) アーカイブズ研究の実務点検：ラテンアメリカの情報アクセスに関する影響と近代文書館学への情報技術について
3 方針と方法論の 考え方	<p>司会 クリスティーン・デュシャン (IFLA、フランス)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ジョン・マクドナルド (カナダ) 基調報告 現代の記録、アクセスおよび国際的アーカイブズ業界 その今後の方向性 ◆ピーター・ホースマン (オランダ) 利用者からビジターへ？：アーカイブズのための情報通信技術の方向性 ◆ハカン・ファルン (スウェーデン) 電子政府をめざして ◆ジョン・カーリン (米) 米国のアーカイブズの方向性 ◆スザンヌ・リシェル (カナダ) 技術と国家的情報政策—フランス語圏の場合
4 研修と開発	<p>司会 モンセフ・ファクファク (チュニジア)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆サラ・タイアック (英) ICA円卓会議研修と専門性に関するセッションへの問題提起 ◆コンフォト・ウクウ (ナイジェリア) 研修と開発 ◆チャカル・ガリアエ (チュニジア) 研修と開発 ◆パトリシア・ガレアナ (メキシコ) アーカイブズのアクセス：技術的な課題 ◆沈麗華 (中国) 情報化時代の諸問題：中国のアーキビストの研修と位置付け
5 残された諸問題	<p>司会 クリストフ・グラーフ (スイス)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆アビー・スミス (米) デジタルアーカイビングのモデル ◆クリスティーン・アーデン (ARMA International) 現代記録の管理覚書 ◆クリスティーン・デュシャン (IFLA) 北京アジェンダ ◆アン・サーストン (IRMT) 国際記録管理トラストについて ◆ゲイリー・ピーターソン 著作権について

- 記した業務用の手引書とその定期的な改訂；
4. 旧電子記録委員会の成果である文献調査に基づき、ICAは電子的方法によるアーカイブズの管理・利用、及び電子記録の管理に関する総合的かつコンパクトな詳細目録を作成し、広く会員に浸透させるよう努めること；
 5. ICAは傘下の組織のいずれかに対し、インターネットアクセスを利用したアーカイブズネットワークの設立と統合、及び直接ユーザーニーズに応えるサービス提供の為の最良の業務処理方法について、インターネットサービストレンドの調査と指針提供を委任すること；
 6. ICAはヨーロッパアーカイブズネットワークなど、現在のネットワークの展開を支援するための情報通信技術および情報管理についての調査結果及び新出のものについての情報を共有し、これらすべてのイニシアチブの調整を行い、収れんを促進すること；
 7. 北京アジェンダおよび現代記録管理協定の枠組みの中で、ICAはメンバー各々の情報通

信技術と情報管理の開発レベルに適合し、国際的にも価値ある教材の開発とその広汎な配布を重点項目とすること；

8. アーキビストは国立機関、専門家団体及び地域ネットワークを通じ、情報通信技術と情報管理に関する法令、政策、方向性の討論に参画し、記録の原本性と信頼性が時間経過にかかわらず維持されるように努めること。

第33回国際文書館評議会円卓会議は、シャルル・ケスケメティ氏の引退にあたり、これまで数十年に及ぶその卓越した業務と貢献に謝意と賞賛を表し、あわせてベルギー文書・図書館のフランク・デルマンス氏およびアンドレ・ヴァンリー氏による記念文集の編集出版によりケスケメティ博士の不滅のキャリアを記録としてとどめることができたことに無限の感謝を、そしてエリック・ノルベリ・スウェーデン国立文書館長ならびに職員の皆様には、その素晴らしい準備と暖かいもてなしに深い感謝の意を表明する。